―D.D.―

Q 1 D.D.を導入された経緯と「語る」ことへの抵抗を克服していった過程は？

A 1 子どもの育ちや様子について担任と短時間勤務教員とが話をする機会を確保することで、共に子どもの育ちを支えていく実践者として考えていきたいと思いました。「一緒に語りたい」「省察しながら語りたい」という純粋な思いを実現するシステムとしての場がD.D.です。
「語る」ことへの抵抗が完全に克服したというわけでもないと思います。まだ「語る」ことで、自らの省察が深まっていく実感を得てきている過程にいるのだと思います。

Q 2 保育後から「語り」になるまでに時間を要し、時間が経過してから言葉になることもあると思いますが、少し時間を経てから語る機会はありますか？

A 2 D.D.で完結させるのではなく、そこで得た視点を自分で持ち帰り改めて考えるということを繰り返しているように思います。
D.D.や履歴会議、環境会議などで「語る」機会が保障されていることで、「あの時にはこう思っていたけど今はこう考える」と自らの捉えの違いを感じることが出てきました。そのことによって自らの変容を実感し始めています。

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

―D.D.―

Q 3 D.D.における目的は、保育者の資質・能力にかかる対話を目指しているのか？

A 3 もちろん、私たち実践者の保育の専門性を高めていくことは目指しています。ただ、その目的においてD.D.が有効な手段であるかどうかは、やりながら模索していくという手探りの一年間でした。またD.D.によって何が生み出されてきたかは、動画でご紹介した通り、今の私たちにとっての実感として得ていることに過ぎません。でも、ここで確かに実感していることを言語化することによって、「語る」ことによる省察が保育者の資質・能力にかかる対話へとつながっていく可能性を示すことができるのではないかと感じています。

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

ー「ひらく」「対話」による変容ー

Q 1 履歴会議を経て、素材や教材の扱いを変えてみることで、遊びの広がりや子どもの新たな姿が見られた事例はありますか？

A 1 直接的に、扱う物を変えることによる変容を感じるというより、今年の取り組みにおいてはもう少し長期的な視点における変容を感じています。
自分自身がなぜその素材や教材を扱おうと考えていたかを見つめ直すことで、自分自身の子どもの見方に気付き、その気付きによって実践が変容することで、子どもへ向ける自らのまなざしが変容しているという感覚は得ています。
子どもの遊びや姿が変わるのか、実践者のまなざしが変容するから子どもの姿に変化があるように感じるのか、そこは背中合わせのような気がします。
「語り」の中には自分では気が付かない自分の思考の癖や、当たり前として捉えている見方があることが、「対話」をすることによって見えてくることがあります。そのことに自分が向き合うことで、徐々に教材への向き合い方や子どもの捉えにも変容が生まれてくるのだと思います。

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

ー「対話」への心もちー

Q 1 「語ることへの抵抗感」から、対話を肯定的に捉えるようになったとあったが、対話の際の工夫は？

A 1 対話の場では、研究部がファシリテーターの役割を担ってきました。
これまで話す機会の少なかった先生に言葉を発してもらえるように、まずは尋ねてみることを意識していました。そうすることで「語る」ことを日常にしてきたといえるかもしれません。また、他者批判をする場ではないことを意識し、「私はどう思うか」「なぜそう思うのか」と自分自身に向くよう問いかけていくことも必要なことではないかと思います。

Q 2 「まとめない」を共有することは大変ではないかと感じた。様々な価値観をもつ職員と保育の方向性を見出す際に、「まとめない」ことで実践が変容していく方向へ向かうようになった過程を知りたい。

A 2 「まとめない」ことを最初から共有して「対話」をしてきたというよりも、それぞれの先生が「私はどう思うか」を自らに問えるように問いかけていくことで、結果「まとまるものではない」ことが感じられるようになってきたように思います。答えのない保育を答えのないままに「よりよくしていく」方向性を模索し続けている過程に居続けることが必要なのではないかと感じています。

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

ー「対話」への心もちー

Q 3 対話を深めても、折り合いがつかないことはありますか？

A 3 思いや考えはそれぞれですから、「折り合いがつく」「折り合いをつける」必要はないのかもしれません。それよりも、“折り合いがついていない”と感じる状況を受け入れた上で、「どうしてその状況を“折り合いがつかない”と私が感じているのか」を見つめることで、無自覚な自身の保育の捉え方に気付けるのかもしれません。もしかすると、“折り合いがつかない“その状況こそが、ネガティブケパビリティといえるのかもしれませんね。

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

ー時間のマネジメントについてー

Q 1　勤務時間の異なる先生方もおられる中、保育を語る時間の確保はどのように工夫されていますか？

A 1　まず、D.D.において保育後の15分間、必ず集まることから始めました。椅子を置いてそこに座り互いの顔を見ながら話すことを習慣化しました。「語る」ことが習慣化してきたことで、その時間に限らずいろいろなところで「対話」が生まれやすくなったのではないかと感じています。職員室での休憩時間・教材準備の時間などのちょっとした時間に、いろいろな職員間で『保育の話』をすることが増えてきました。
環境会議や履歴会議については、勤務時間の兼ね合いから、今のところは担任のみで実施しています。

Q 2　「対話」の土台となる記録が大切なのだと感じました。日常的に記録の時間を設けていますか？

A 2　現在は記録の時間を確保しているわけではありません。
履歴会議や環境会議では事前に記録を準備しますが、実際に語り始めるとその記録には書いていないことを話していることも多くあります。記録は「語り」のきっかけになるものであり、「語る」ことが、自らの省察を深めたり、新たな視点を得る機会になると感じています。どのような記録が「語り」をさらに促すのか、時間のマネジメントも意識し、記録の在り方についても今後模索していきたいと思っています。

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

ーその他ー

Q 1 日本の学校教育が省察を求めてこなかったように感じ、乳幼児期の保育の在り方にもかかわるように思っている。保育者自身が省察の営みに挑戦する中で、幼児期の省察につながる力の育成への視野が広がったということはありますか？

A 1 「対話」をしながら保育をすることの意味を捉え直す必要があるのではないかと感じます。いかに「あたりまえ」として物事を捉えているかということが省察の営みに挑戦する中で実感として湧いてきているように思います。その実感をもって子どもと接した時に、いかにこれまで「子どもの声」を自分の文脈で理解していたかに気付く瞬間がありました。
子どもの言葉や、子どもの問いの意味をそのままに受け止め、新たな問いとして「対話」を重ねることで、子ども自身も自らの経験の意味を違う視点で振り返る機会になっていくのではないかと思います。

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.

ーその他ー

Q 1 それぞれの考えをもつ職員が、どのように子ども一人一人の「育ち」や「学び」について捉えているのですか？

A 1 本質的な問いをいただきました。この問いをいただいたことで、「私は“育ち”や“学び”をどのように捉えているだろう」と考えさせていただきました。
その捉えは一度言葉になれば、そこから先は普遍的なものになるというものではありません。時期を経てその視点で再度考えることで、あの時の私の捉えと今の私の捉えには違いがあることに気付きます。また変わらないものがある時もあります。
「対話」を続けていくと、本質的な問いに出会うことが多くなりました。「楽しさって何？」「育ちと課題って何が違う？」「遊ぶってどういうこと？」「学級って一体何？」「協同を求めるけど、どうして大切だと感じるの？」など上げ始めればきりがありません。そしてその問いの答えは全く見つかっていません。答えが決まっているものではないので、問い続けることが必要なのだと思います。
共に「語る」ことで、自分自身の捉えの変容を感じていく感覚を一緒に味わいませんか？
ぜひ、本園のオンライン研修や公開保育研修会などにご参加ください！

奈良女子大学附属幼稚園
ならじょしだいがくふぞくようちえん
Kindergarten Attached to Nara Women's University

Copyright©2011-2019 https://www.digipot.net All rights reserved.